

私の隣人とはだれですか

ルカの福音書 10 章 25-37 節

はじめに

私がウェルカム・サンデーで説教をする時は、ルカの福音書から「イエス様に会った人々」を取り上げてお話しています。今日の聖書箇所には、「ある律法の専門家」とイエス様の出会いの出来事が書かれています。そして、有名なイエス様のたとえ話である「善きサマリア人」が出てきます。

1. どうしたら人は救われるのですか？

「ある律法の専門家」はイエス様に質問をします。「先生。何をしたら永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか」。「永遠のいのち」というのは、簡単に言えば「救い」のことです。つまり彼は、イエス様に「どうしたら人は救われるのですか」と質問するのです。

でも彼は、イエス様に救いを求めているわけではないのです。25 節を見ると、彼はイエス様を「**試みようとして**」質問したとあります。彼は、ただ単にイエス様と議論しようとしていただけです。そして出来ることなら、イエス様を言い負かして、恥をかかせ、自分の「律法の専門家」としての知識を周りの人に示したいと思っていたのです。

彼は彼なりに、「どうしたら人は救われるのか」という問いの答えを持っていました。それは、「『**あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい**』また『**あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい**』とあります」、つまり「愛に生きる」ことです。彼は、「人が救われるために必要なのは、神を愛し、人を愛することだ」と考えていたのです。この彼の答えは正しかったのです。イエス様も、「**あなたの答えは正しい**」と答えたほどです。

しかしイエス様は、彼に大事な一言を付け加えます。「**それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます**」。彼は、「どうしたら人は救われるのか」という答えを、彼なりに持っていました。そしてそれは正しかったのです。しかし彼には、欠けていることが一つありました。それは、「実行すること」です。「愛を実践すること」です。言葉だけでなく、実際に神を愛し、人を愛してみることです。

彼の答えは正しかったのです。でも「愛」を実践していなかったのです。その救いにとって大切な事実が見えていなかったのです。それは、誰も完璧に神様を愛し、人を愛することなどできないという事実です。人は誰でも自己中心で、自分のことが何よりも大事で、愛からほど遠い存在であるという現実です。もし人が救われる唯一の道が、神様を愛し、人を愛することだとすれば、この世で救われる人など一人もいないという現実です。彼は、律法に関

する知識は十分にあったのです。でも、人間の現実を見る目、人間の罪の現実を見る目、自分自身の心を深く探る目がなかったのです。彼は、愛を実践していなかったために、人間の罪の現実が分からなかったのです。

三浦綾子さんの「塩狩峠」という小説の中で、ある伝道者が、一人の青年にこんなことを言うのです。「聖書の中のどれでもいい、ひとつ徹底的に実行してみませんか。徹底的にだよ、君。そうするとね、あるべき人間の姿に、いかに自分が遠い者であるかを知るんじゃないかな」。

私たちは、聖書のことを頭だけでは理解することはできません。実践してみて初めて分かるということもあるのです。「あなたは罪人だ」「神様はあなたを愛している」とただ言われるだけでは、本当の意味では理解できないのです。実践してみて、できない自分に直面して、落ち込んで、もがいて、それでもなお自分が赦される、受け入れられるという体験をして、初めて自分の罪が分かり、神様の愛が分かるのです。一步踏み出してこそ、分かるということがあるのです。そしてそういう体験こそが、自分を本当に変えていくのです。頭だけの聖書の理解では、自分を変える力はないのです。

2. 誰が自分の愛すべき人ですか？

「律法の専門家」は、29 節で「**自分が正しいことを示そうとして**」とあるように、自分は愛を実践している、実際に人を愛している、自分は救われるべき正しい人間だと思っていました。確かに彼は、ある意味では愛を実践していたと思います。でも彼の「愛」は、非常に狭く限られたものでしかなかったのです。そのことがよく表れているのが、29 節の彼の言葉です。「**では、私の隣人とはだれですか**」。彼はここで、「誰が自分の愛すべき人ですか」と言っているのです。

彼のような「律法の専門家」は、自分が愛すべき人と愛さなくていい人を区別していました。ユダヤ人以外の異邦人は愛さなくていいとか、倫理・道徳的に乱れている社会的な罪人と呼ばれる人たちは愛さなくていいと考えていたのです。彼が愛すべき隣人というのは、非常に限られた人たちであったのです。言ってみれば、比較的愛しやすい人たちであったのです。彼は、愛しやすい人たちの中で、自分は人を愛せている、愛を実践している「愛の人」だと思い込んでいたのです。

でもイエス様は、そんな彼に対して、「善きサマリア人」のたとえ話をします。強盗に襲われて半殺しにされたユダヤ人を誰が助けるか、という話です。半殺しにされたユダヤ人が倒れている道に、三人の人が通ります。

一人目は「**祭司**」です。祭司は、ユダヤ人を代表して神様にいけにえを捧げたり、祈ったりする宗教的な人です。しかしこの人は、倒れているユダヤ人を見ても「**反対側を通り過ぎて行った**」のです。

二人目は「**レビ人**」です。このレビ人も宗教的な人です。しかしこの人も、祭司と同じように「**反対側を通り過ぎて行った**」のです。

三人目は「**サマリア人**」です。サマリア人とユダヤ人は付き合いをしない関係でした。ユダヤ人が、サマリア人を宗教的に汚れた人々と軽蔑していたからです。しかしこのサマリア人は、倒れているユダヤ人を見ると、「**かわいそうに思って**」、応急処置をして、「**宿屋に連れて行って**」、費用まで払って「**介抱する**」のです。

イエス様は、このたとえ話で「**本当の愛の実践とは何か**」を教えているのです。宗教的に差別されていたサマリア人が、その差別を超えて、自分たちを差別していたユダヤ人のために犠牲を払って愛を示す、そこにこそ「**本当の愛の実践がある**」、この人は愛すべき人でこの人は愛さなくていい人という区別をもうけて、自分の愛しやすい人たちだけを愛している、そうして自分は愛のある人間だ、自分は救われるべき人間だと思い込んでいる、そこには「**本当の愛の実践はない**」と教えているのです。

4. 本当の愛の実践

イエス様はある時、こう言われました。「**自分を愛してくれる者たちを愛したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、自分を愛してくれる者たちを愛しています。自分に良いことをしてくれる者たちに良いことをしたとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、同じことをしています**」(ルカ 6:32-33)「**しかし、あなたがたは自分の敵を愛さない**」(ルカ 6:35)。

イエス様が求める愛の基準は、私たちの理解を遥かに超えています。イエス様は十字架に架かって死なれましたが、自分をあざ笑い、ムチ打ち、自分の両手両足に釘を打って十字架に付けた人たちのために、こういうふうに祈りました。「**父よ。彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです**」(ルカ 23:34)。イエス様こそ「**本当の愛の実践**」をされた方です。イエス様だけが「**救いに至る完全な愛**」を持っている方です。

5. 救いの道

イエス様は私たちに、「**あなたも行って、同じようにしなさい**」と言われます。

私たちには、二つの生き方があります。一つは「**律法の専門家**」のように、愛の基準を引き下げ、自分の愛しやすい人たちの中で、自分はそこそこ愛のある人間だ、そこそこいい人間だと思い込んで生きる道です。

もう一つの生き方は、イエス様が求める愛の基準で、「**本当の愛**」を実践してみる道です。「**あなたも行って同じようにしなさい**」という言葉に従って、一歩踏み出してみる道です。しかしその道は、自分の愛の無さを痛いほど思い知らされる道です。そして自分の力では救われる望みがないと痛いほど思い知らされる道です。しかしその道にこそ、イエス様が待っておられるのです。誰かの隣人に本気でなってみて、本気で寄り添ってみて、時には傷つけられたり、裏切られたり、その中で怒りや憎しみが生まれたりして、赦せない思いが生まれたりする、でもそういう愛の葛藤の連続の中にこそ、イエス様と本当の意味で出会えるのです。愛の無い自分を痛いほど思い知らされて、自分が罪人であることがはっきり分かり、自

分はイエス様の十字架によってしか救われる望みがないことがはっきりと分かるのです。

イエス様は「それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます」と言われました。この言葉の意味は、「愛を実行すれば救われる」という単純な意味ではありません。「愛を実行すれば、自分に愛がないことが分かるだろう、そして自分の力では救われる望みがないことが分かるだろう、そしてわたしの十字架による救いが見えてくるだろう」という意味だと思います。

おわりに

サマリア人のように、誰かの隣人になって本気で愛を実践する道は、決して平坦な道ではありません。自分の愛の無さを思い知らされる道です。時には傷つけられたり、裏切られたり、逃げ出したくなったり、時には相手に対する憎しみや怒りが湧いてくる道でもあります。本気で誰かの隣人になろうとすればするほど、本気で誰かを愛そうとすればするほど、傷ついてボロボロになる道です。サマリア人のようでありたいと願っていたけれど、いつの間にかボロボロに傷ついて立てなくなって、あの半殺しにされたユダヤ人のようになってしまうのです。でもそれでいいのだと思います。それでこそ、本当のサマリア人であるイエス様に本当の意味で出会えるのです。

イエス様も同じ道を辿られました。イエス様も私たちの隣人になろうと、愛の実践をされました。そして最終的には、弟子たちに裏切られ、唾をかけられ、殴られ、ムチ打たれ、ののしられ、両手両足に釘を打たれて、十字架に付けられたのです。イエス様は半殺しにされるどころか、心も体もボロボロになって、実際に殺されたのです。私たちの隣人になるために、私たちを本気で愛するために。しかしイエス様は、父なる神様と聖霊の力によって、復活されたのです。もう一度立ち上がられて、今もなお私たちの隣人となってくださり、私たちに愛を示してくださっているのです。

イエス様は、私たちに「あなたも行って同じようにしなさい」と言われます。「わたしがあなたの隣人になったように、あなたも誰かの隣人になりなさい」と言われるのです。誰かの隣人になって本気で愛を実践する道は、ボロボロに傷つく道です。立ち上がれない程傷つく道です。しかしそこには、同じ道を辿ったイエス様がおられるのです。イエス様が、サマリア人のように私たちの隣人となって、私たちを助けてくださるのです。復活された力によって、私たちをもう一度立ち上がらせてくださるのです。その時私たちは、「律法の専門家」のように「自分の正しさ」を示す必要など全くないのです。ただ「自分の愛の無さ」を正直に示せばよいのです。正直に告白すればよいのです。そうすれば、愛と赦しの力によって、もう一度立ち上がれるのです。もう一度、誰かの隣人になる力を与えられるのです。

誰かの隣人になるという道は、決して簡単な道ではありません。でもそこにこそ、本当の意味での、私たちとイエス様との出会いがあるのです。ただ頭だけで、聖書の知識だけでは、本当の意味でイエス様とは出会えません。誰かの隣人になってみる時、本当の意味でイエス様と出会えるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは私たちに愛を求めておられます。神様への愛に生きること、隣人への愛に生きることが求めておられます。しかしあなたが求めておられる愛は、私たちの想像をはるかに超えた愛です。自分を十字架に付ける人々の赦しのために祈るような愛、自分の敵を愛する愛です。

私たちは自分の愛しやすい人々だけを愛して、自分が愛のある者だと錯覚します。しかし神様から見れば、私たちは誰でも愛のない者です。永遠のいのちを受け継ぐことができない者です。どうかあなたが求める愛を実践する勇気を与えてください。そして自分の愛のなさを受け入れる心を与えてください。またイエス様の十字架以外に自分の救われる道はないことを認めさせてください。

私たちも、イエス様のように誰かの隣人になることができますように。

この祈りを、私たちの善きサマリア人であるイエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。